

column

# 誰でも出来る『防災キャンプ』

～お客さんに、させない、ならない、学び合う～



## ① 皆さんキャンプは好きですか？

皆さんはキャンプをしたことがありますか。テントを張ったり、火を起こしたり、限られた道具で食事を作ったり。昔の思い出がある方もいれば、今でも現役でキャンプを楽しんでいるという方もいるのではないでしょうか。

では被災地でのボランティア活動に参加したことや、実際に災害を経験したことはありませんか。沖縄だと断水や北部豪雨、津波警報や台風での停電などを思い浮かべる方もいるかと思いますが。しかし近年沖縄では広域の大規模災害はないため、被災地ボランティアや長期の避難生活を強いられるような被災経験が無い方も多いと思います。私自身もその一人です。

そんな中、私は「一般社団法人災害プラットフォームおきなわ」という団体に所属し、防災キャンプという防災プログラムの伴走支援を担当しています。このプログラムは2018年度に専門家や地域団体と共に開発したもので、特に自助や共助を養うプログラムとなっていています。当時私はキャンプ関連の事業もしていたので、言い出しっぺという形でプロジェクトがス

タートしました。現在も「キャンプ沖縄事業協同組合」という、キャンプ関連事業者を中心に構成される協同組合の副代表理事としてキャンプ関連の活動も行っています。

## ② 経験がないものをイメージするチカラ

大規模災害を経験していない私が、防災キャンプの立ち上げ支援や伴走支援に約8年間取り組む中で、一つ大切にしているのは「経験がなくとも、災害を想像する力は少しずつ鍛えられる」という考えです。災害は実際に被災したり、被災地ボランティアを経験したりしなければ、なかなか現実感を持ちにくいものです。しかし誰も経験するものではありません。



そこで重要になるのが、疑似的に災害をイメージする取り組みです。防災訓練への参加、被災者の体験談や記録映像から学ぶこと、非常用備品や非常食を実際に使用してみることなど、その方法は多岐にわたります。

中でも「防災キャンプ」は有効な手段の一つと言えます。実際に避難所や避難場所となる可能性のある場所で宿泊し、限られた環境の中で判断・工夫し、周囲と協力して行動する体験は、非常時の状況をより現実に近い形で感じさせてくれます。また季節を変えて実施することで、さまざまな変化や失敗があり、その中で新たな気づきが生まれます。

## ③ イメージするチカラは組織を守るチカラになる

災害時の疑似体験は組織内でも考える必要があります。事業が止まった場合の対応や人の安全確保、取引先や地域への影響など、具体的に考えるきっかけにもなります。

組織や事業を預かる立場にある人にとって大切なのは「経験がないから分からない」や「今



までそんな事起こってないから今後も起きない」で思考を止めないことです。想像力を鍛えることで、BCP（事業継続計画）を机上の計画で終わらせず、実際に機能するものへと近づける土台にもなります。防災キャンプは避難生活における自助を中心としたプログラムなのでBCPに直接繋がるものばかりではありませんが、防災を考えるきっかけや災害時をイメージすることに役立ちます。

#### ④ 誰でもできる「防災キャンプ」

私たちが行う防災キャンプでは、大切にしている「3つのルール」があります。これを理解すれば、プログラムの内容は自由に組み立てても実施できる仕組みになっています。専門家とともに開発したプログラムではありませんが、専門家がなくても誰でも取り組めることを特徴

としています。そのため、防災キャンプは特定の立場や場所に限定されることなく、さまざまな主体とともに実施してきました。

地域主体の場合  
は、自治会や自主防災組織と連携し、公

園や広場を活用し、屋外避難を想定した形で実施。さらにPTAや行政等と連携し、小中学校の体育館で防災キャンプを実施する事もあります。「なほ防災キャンプ」では、防災教育の一環として授業と組み合わせた事例もありました。大学で実施した際は、教員や学生の専門性を生かした炊き出しプログラムなどを取り入れ、防災を学問だけでなく実践として捉える場となりました。また、公民館や都市公園などの公共施設を管理する民間事業者が主体となって実施する場合があります。施設の特性を踏まえた防災キャンプを検討し、実際の建物や設備を使用することで、図面やマニュアルだけでは見えにくい課題が明らかになります。さらに、従業員が参加することで、安否確認や初動対応、事業継続に関する課題を体験的に整理するきっかけにもなります。



#### ⑤ お客さんにならずに学び合う

タイトルにも繋がりますが、災害時には、私たちはもはや「サービスを提供する側」と「受け取る側」という関係ではいられません。避難行動や避難生活の中で求められるのは、誰かに任せる姿勢ではなく、一人ひとりが考え、行動し、互いに助け合う姿勢だと思います。

防災キャンプは、疑似避難生活を体感し、人と組織がともに考え、学び合うための実践の場です。お客さんや傍観者として参加するのではなく、当事者として関わることでこそ、個人だけでなく組織としても必要な備えに繋がってきます。是非一度防災キャンプにトライしてみてください。

#### プロフィール

みやひら みらい  
宮平 未来 氏

キャンプ沖縄事業協同組合(CAMP-O協同組合)副代表理事  
(一社)災害プラットフォームおきなわ事務局長



1990年沖縄県那覇市出身。琉球大学農学部卒。年間約50回キャンプするキャンパー。2017年から現在までキャンパー兼コーディネーターとして活動。2020年にキャンプ沖縄事業協同組合や(一社)災害プラットフォームおきなわを有志と立ち上げ、防災や健康、教育やコミュニティなどキャンプを通じた新しい可能性を探求している。